The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	空間環境の情緒性に関する建築計画学的研究
Author(s)	家本, 修
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3110199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 119 】

氏　　名	家本　修（いえもと　おさむ）
博士の専攻分野の名称	博　士（工学）
学位記番号	第　12267　号
学位授与年月日	平成8年3月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	空間環境の情緒性に関する建築計画学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 紙野 桂人 教授 舟橋 國男　教授 柏原 士郎　教授 東 孝光

論文内容の要旨

空間環境における情緒的な安定感，安心感，その場所での圧迫感，開放感を形成する上で，人間空間環境に対する感覚経験と空間条件との対応はまだ十分に解明されていない。本論文は，空間環境の情緒性の測定方法を明らかにすることとその情緒的安定の形成条件を明らかにして，建築環境の安全・快適化を誘導する空間計画手法に示唆を与えようとするものである。

序章は，研究の背景・意義を示し，既往研究と本研究の関係と位置付けを論じ，建築空間における諸感覚の意味・概念についての整理を行っている。

1章では，日本語動詞のもつ意味と空間との関係から，測定意図が悟られ難く数種の情緒性を同時に測定できるバーバル・サンプリング法を見い出し，その有用性の検討を行っている。児童を対象として居室スケッチ画の提示実験に，バーバル・サンプリング法を適用し，物理的衝迫に応じる閉鎖感や圧迫感などの感覚は早くから生じ，社会的関係意識としての領域感は小学校低学年で，プライバシー感は小学校中・高学年で形成されることを明らかにしている。

2章では，幼児を対象として，居室内観および住宅屋根形態の透視図提示ならびに住宅模型操作による空間イメージの再現実験をおこない，線画の提示実験から，視線位置によって空間の大きさが判定されることを明らかにしている。住宅の模型操作では，住宅の配置型とその外観分類との間に一定の関係が見られ，また，配置型と，自宅での遊び時間，遊び部屋の広さとの関係が認められることを明らかにしている。

3章では，言語提示による連想法の実験を行い，場所の行動特性と意味付けの関係から，建築用途名称や室名称の潜在的な情緒的意味は，その部屋の一般的な用途と人の学習経験によって形成されることを明らかにしている。

4章では，情緒性測定法として，図形の意味と空間の情緒性の関係に着目するピクチャー・サンプリング法を考案し，各種の屋内外スライド映写による実験についてME法とピクチャー・サンプリング法との比較検討を行い，その有用性を確認している。空間における人の分布密度によって生じる空間環境の情緒性変化に関する評価実験から，情緒的に安定した感覚を生じる密度を定量的に求めている。また，内部空間デザインのあり方によって圧迫感が軽減している空間環境例を見出し，地下空間等の設計における圧迫感軽減手法を示唆している。さらに，実在建物における高所恐怖に関

する実験に，ピクチャー・サンプリング法を適用し，高度差による情動の変化曲線を求めるとともに，ピクチャー・サンプリング法が，測定場所を問わず，実在空間環境の情緒性測定に簡便に利用できる測定法であることを示している。

5章では，聴覚のみによる居室の広さの判定実験を行っている。中途失明者は失明期間に比例して判定誤差が大きくなり，失明までに形成された空間記憶が崩壊し，視空間とは異なる聴覚による空間記憶構造の存在を指摘している。

結章では，本論文の知見をまとめ，物的・社会的空間環境の情緒的把握の諸傾向と情緒変動の諸要因を導いて，空間環境形成の操作条件に言及している。

論文審査の結果の要旨

空間環境が有する情緒性ならびにその生起の機序を解明することは，人間の安定した居住環境形成にとって重要な建築計画学的課題であるにもかかわらず，未だ十分な研究を行われていない。本論文は，空間環境の情緒性測定の方法を新たに開発し，これに基づいて空間環境における情緒性安定の形成条件を明らかにして，建築空間環境の快適化を誘導する計画手法に示唆を与えようとするものである。得られた成果を要約すると次のようになる。

(1) 空間環境が有する情緒性を測定する訪欧として，バーバル・サンプリング法ピクチユア・サンプリング法を新たに考案し，それぞれの有用性を確認している。

(2) 空間環境が与える閉鎖感・圧迫感ならびに社会的関係意識としての領域感・プライバシー感の，児童における発現ならびに発達過程を明らかにしている。

(3) 幼児における空間環境認知特性と遊び行動傾向との関連を明らかにしている。

(4) 室の名称が含意する行動特性とその意味づけ，ならびにそれらが形成される過程を明らかにしている。

(5) 人が存在する空間環境について，人の密度と安定感との関連を明らかにし，もっとも安定した感覚を与える密度を見出している。また，高さとそれがもたらす恐怖感との関係を明らかにし，その軽減策を検討している。

(6) 中途失明者の聴覚による空間環境判断の様相を検討し，視覚による空間判断との構造的差異を明らかにしている。

以上のように，本論文は空間環境の有する情緒性の測定方法を開発するとともに，その影響の機序を明らかにして，建築空間環境の安定・快適化に関する計画手法を示唆しており，建築計画学に寄与するところが大きい。よって，本論文は，博士論文として価値あるものと認める。